





伊地知氏家譜

は抄ハ二条の攝政治承基治承年治承七十五條ハ時二条

家の嫡流也河幸年治承七旬治承二条ハ時仁王

年治承九代ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

子義詮ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

抄ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

代ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

わハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

乃ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

考ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

會ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王

作ハ河幸治承年治承七旬治承二条ハ時仁王



反三山通
上教ノ用也
併富流和
ノ心通也
用也

一、和、平、祥、字、及、甲、字、ハ、平、祥、上、
平、祥、ノ、二、字、ナ、リ、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、

一、和、平、祥、字、及、甲、字、ハ、平、祥、上、
平、祥、ノ、二、字、ナ、リ、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、

一、和、平、祥、字、及、甲、字、ハ、平、祥、上、
平、祥、ノ、二、字、ナ、リ、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、
平、祥、ノ、二、字、ハ、平、祥、也、

都説平ヲル賢良對策今試場前程始於此ナリ

玉日所陳切

者の帝一曰く...
籍花元時竹雨雪及才ノ詩燈子文章早吃羅生児上林薙桂年三教不許用人折一枚
於一極林の二極真山入行玉の...
早桂八秋ノ反才ノ... 撰花春ノ反才ノ...
入真山の... 一枚片玉... 樹母や...

一 鈴羊掛角... 鈴羊ハ藪場... 掛く物...
一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

一 鹿角の... 鹿角ハ山... 鹿角ハ...

鹿角ハ山... 鹿角ハ山... 鹿角ハ山...

なり起るの教壇夫子常閑居せりとつるもるの
娘公孫もみ常とてまをきりあはくふわあ
み果るのとつらとてまをきりあはくふわあ
ましつらとも閑居閑居の市中よりつらつら
皆少も弱ま常念世俗更假名向鍊若とつらつら
みとては寂靜と静より寂靜ハ牛於れささく
つらつらとつらつらとつらつらとつらつら
何とてみとてつらつらとつらつらとつらつら
み果るのとつらつらとも閑居閑居とつらつら

命書云云 子曰富と豊是人の所敬 不以其道得之 不亦貧と賤是人の所惡 不以其
一 徳と才と 注云時 有を奉政君子履道而又貧賤 其則不以其道而得之者 雖是
人所惡 不可遠而去 君子去仁 惡乎成名 君子無終食之間違仁 造次必於是 顛沛必於是

一 冠とけりやとつらつら 漢朝は七十年は隠居する也
一 教壇とて七十の致仕とつらつら 源氏物語は致仕の
大臣とつらつら 七十年は致仕とつらつら
一 清遠と宴とつらつら 閑居閑居三つらつら
一 金石の交とつらつら 閑居閑居三つらつら
一 閑居閑居とつらつら 閑居閑居三つらつら
一 閑居閑居とつらつら 閑居閑居三つらつら

級と云階級
也第也

鳴トハ是ヲノ口ニト云リ二柱ノ御神此鳴ニ下居テ尋殺ヲ造テ共住玉ヲ
のり二神拜シ成玉ノ目ノ柱ヲメクリテ神ハ右ヨリメクリテ成言ヲ成玉ノ男神ハ
天地ノ中ニ一ノ形とほタヨリメクリテ一ノ形とほ成玉ノ男神ハ三才とほ
文武華牙とタヨリメクリテ一ノ形とほ成玉ノ男神ハ三才とほ

まゝ陽神のこゝに陰神御座さす才四より
陰陽二の御神也せしは才一國常立尊とと才三
神まゝ二神御座ととこも心々無なる
才六の面是惶根の二神御座ととこも才七の伊弉册尊伊弉册尊形はひ
多別る可委才七の伊弉册尊伊弉册尊形はひ
てこゝの嫁取有財女神のふり善哉やう
ゆしおのひの毛を落し給や可委毛を落し給や
こ生れ給は才七の伊弉册尊伊弉册尊形はひ

こゆりまはま情ありてぬくまゆり未開開時とこ
とりおやもとも情不ぬ物やとありま地とこ
とちとちの中へまを授けと受とととて天地人三才
とありま地あり二儀おととと地のこゝあり地
神ありと開くこゝありま漢ととと六義ととと
物とととゆり物ととと教のハ漢あり開開不及
算教程のこゝありととと六義ハ漢ありととと
ゆりととと孔也也ととと風賊比真雅頌のこゝあり
才七の伊弉册尊伊弉册尊形はひととと六義和
る子ととと木朝ととと并れら義ととと唐のゆり
回根のあり
一花ととと香ありととと心懐のこゝありととと并れらあり

とく詩とのつる情吟詠とてつる百物の
 あり姿心より出るものなりと何く吟詠と下
 とや亦冷北都同海の物候は地開開よりい来
 素直鳥尊出たまへ重垣言も奉教師近の非
 波津のま又王仁は授うがふゆと後香山の書
 習うる人ふや物と今も心所の并はなを
 不足ともいふれりしり亦は信すし一も
 ちまませく物とまうりもろくゆそ病と
 けり肝とろくもや只海世もあつはうせよ
 尺ゆは及林妙れ姿となうもあつとんといふ
 物や決ま聖人の糟粕やとつるもそ糟とす
 らんとや

一 其實抄ありて花の足跡より并はる瓜実と
韓非子云午和氏楚人十一得玉璞於楚山中献厉王王使玉人相之曰石也
其石不足及武王即位和故王人入之石也
下三日三夜泣尽而絶以血玉使人問曰天下則者多乎十一受其悲和少也非別
史皇王十一而七是也
得玉王
考通命和氏之璧玉
六義凡賦比興雅頌

一 雅してまふれ委勢とふ并用とつる大さあり
 一 和音の道周詩よりみりもふらまふれ委と雅する
 とく宛あつたの宛と毛詩と引出せりそ毛詩ハ
 始が書れとくハまの宛ありとてまの毛長と
 ころも末書とのいぬ遠くと母とく宋の世もく孔
 穎達部の西成とのつるれしれが各子別載せ

格玉云柯傾
式也四上

と及そとのあやとたすしと書給りたりわのらふ吟味を
てらけりしとあやとらり同婆りかももまえは
唐衣なとれ地のこくならと音更ありとこと
真 奥のしそはよううと書黄赤白黒の文とわり
蜀の錦金銅ホのこくあはる同の格もた
とあり青とらよ白くとしとらよはれん
引くまはゆりあり

一 天地と初 鬼神と感せしむる日文華とあり風
情と初ととえりも動天地感鬼神と詩の
序の初や 鬼神とた万物の鬼神や 詩とつら
とく語今する時と心もあらはれり

鬼神と感するとはもはの理や青と只ら成は
やふし 初悲きと縁もれ鬼神よりはとや
ねのしとくともあやとらふも格もし
一 信を信然とさるる一 信を信のありし初信
態への本とさりありま葉よこりれとと
とも宿る所と初とせりともれと世末の
葉葉とた路が青るれも信を信態入り
ゆく一 葉とく葉葉よ人丸身ふしし林は
と風吹まるとりふ人のまよみらるわはか
を信態とのふらつるのこも心才一の青も
を衣と信あよる方寺の初葉はらるる
女人不入の地とみへんとそいふは及音始と

ゆらすく人三はもるつおまじりてとより此号と
俗を俗態乃平のやうなと云仰荒者部せり
なり此之伊勢の事部は竜のまきうそくたられぬ
くぬ縮さく人もたれぬのさあよ山のひめれあさ
りすくしひ号と系極美つるくもる物言とてふ
勢くくじりてやうよ山の布さすはちりま
つたがさく言とてふ此平と方人か一立回帳乃
平とよめるまゆりり気やえくういもるのくひ
賞くく青此滝と人間のくうらさうなあま
よめりこの滝とく人くちくう平ありあされ面目
なり言うれと伊勢くまきうそく相伝くくうり
とあまよとくはくくよめりり気やの他さうりえ

此滝仙姑あり所はまうらと女人文うた伊勢の竜
つまきうそくところ細お通せり此古御帳乃平
乃平よれ滝とてはるま対くか物く女人不
入のまゆとくくひけくまのの平れ皇様す方
小女人又まのあすりあまをくしてよめりあ
あまたりとくうゆあわらうを編よ古御乃伝と御
よ他あまあま平とくゆるはのくく一も俗を俗
態乃まよとゆもあま心地あまよこくして黒
の不同え但地あ乃あまよと記平とくうま地と
想して日地れつう記とと古よりよひあま
ゆも俗を俗態とてまもあま系極美つるくひと記
つるあまあまと見ゆ

一 邊は色乱世の善をも毛納は邊世は色は安くいふ
乱世の善は悉く心忍ゆる事や此の世の海は
時た世ら風もよのつゝすむ風や世の乱る
時の過海も乱世の善河の時有ゆるは善に
あはるる安穏や

一 目か紀は童謡は書そのも牧と山賦とを推しの決
よ後とるをたつゝぬ説の事と書は書一礼を
立國とそまきり色と有るの國風のよと
よありゆるも弄は竹作信ありと瓜種初あり
一 年一字は終いお重い事垣の初り香るも善く
人世つゝいかり和弄はさ終る始りそ志和れた
よ大は海せり乱る神のちと神息和えれすこ

一 邊の種とるかり現於邊世とやとつらんや
一 六義の事よよのつゝ善と風せら決よのつゝと
さすある二製もちる風は弄のちあり慈とよす
とも物よ風よる弄ありと一余乃又汝もつ
くれ

一 今乃弄共くは萬物之感一 四書は萬物花月
等よのよはせくもあつ時と物と政の何とさ
と成一しするとあり世心とよとてころと施
をのよをして政とつすといふとあり
一 古乃聖は清の人の賢愚とよく見
善代は善をばりし物して弄とせむる其
あはるる賢愚の悪用と清らんせむる政と

種見色見るゆへ——澤村の斬とつるをみる
あま糸の御向真大なる成此御言日つる
て大輪推極乃喻ましく分別せしむ事種愛乃
善や重く之種見邊見としるの佛法もをを
愚院（と）ししく道の教よわけしり決りし續成式
并強詔式何も弄れ割法をおせり志や

一 雜乃心を正做しつるもやもは強女の白起しひき
つる所もた弄の正法ありし（理と對しつるありを
ハ毛詩の正法ハ是のよありしとく孔穎達毛詩の心
と、海よくくはくま理と万意よりそり此正法
よそ海世の理と心よこりありとれとて此ハ
雜のされ理といふ正法は心よきたはが務と引く意
るありとるありとのあり

一 漢魏盛唐是ハ漢乃世と魏の世と唐を乃の唐の
世盛唐中唐晚唐とくゆれ凡流うりゆ中よ
と盛唐と凡流のなとすり元和物後高祖流乃
と盛唐と凡高宗を徳年中より玄宗の
天皇の末よありましくとつるゆの安河（と）あり
一 百葉三代其の後唐の撰集其のつひの存存
ふりありひひ人好姫ありりく二代の貴安あり
とやひ依文よまよよみしり
一 模寫模何れも物とつるし事と寫業とて寫此
あり
一 漢朝ハ歌とかりりしは漢士よた代と他の種姓あり

しや只不思を事い母教宗のこす事也 此は誓言
等 方紀よこふともありさふなすもよし也
一平はら瓜しれとすところの決りよ未練の人とのわ
りよ百練鏡の命也唐のいふれあり三月の時
正中のまよ一舟と漕ううくまのまよ百なる碑を
練るまよ 毛と不練と未練とよ未練の言や
金片あり瓜系片に用未まより 鍛練とよありと
このまよあり

一天名に周證禪師文字は師文義と及て裡不覺
效外別傳の情と得る也 是非宗旨又ハ美は死
と免ゆるれともうりなれをむわり毛も宗
旨とせしと教觀不二の宗なる也 惠心御教よ

無道達ハ美は死不知後世名為愚者 至不知一文
一句知後世名為智者とあり 美よ之後世瓜あるとい
る及ありれり也 此ハ美觀ふ二のまよ一お達する極
なれも佛果と求むせんたれ此暫の配立なり美
實ハ美觀不二と立給り

一長音此声常一の讀治は長音とつらありこれ
声句を秘するあり也 毛まよ一流の声句のつら此
介さるぬ也

一拾遺 声此此下よ長音此地と文との事毛ハ地音
毛ハ文の音とさるぬくよし 毛とあり此義ハ
母教宗れんよ文とた別よ案してよめとゆ
ハ一向よ文もなくゆ 一音ハ只伊を沈せしめ

よ自然として中よ文の弄ありと云う事
但定夜等此云文の誤れと秀逸より可成る
そと定ゆるとは公痛まぬ詞を以て
せしむるやまかやもくとわんせしむる
と可成まると云うは自らある間指あふ
一晴の弄此等と地と文との善し相似り但る
目殺あまら沈心一両層はそりり
よさなるともかもしゆや
と文と此等ありともやまか
たう秀弄の大休の弄や
つらあり

一入道長部卿為家冷泉大納言此時ある文又みれ弄

伊忠詞をみり
はらふふわらわらつ
と及始よ冷泉と居せし
と後よ二条より
一本弄を取事
は佛才子此離婆多の
ふちる堂あり
二の鬼人を取
人取らる鬼
ありしと
可會とく
人取らる鬼

一、万葉の弄なすとさぬくは性る開白ちと神の月
ひよりすしとゆとまよひのりもさる万葉の
さゆや地祇の浦さひくわねるる言ち足さた
あしとと向ると皮開白ちるんやこふ月のり
とじとよんねりもさすしれちひなれとよ
くとるるれさまた万葉の弄もすまかり
るやれ言とゆるす事一傳是花のしとと
言や地祇の浦ととつるそく津坂か志賀く
ゆとくより神の浦と号とと神道の秘所也
とそ天より神と反神れ言は月少根在地り
おましとる神とと祇の字と月次さゆとふとの
穀山の因縁しりりり但神經云一切衆生悉有佛

性如来常住無有變易とつる浪声流よ止すゆる延
ととれ波止土濃とちとと大言權現の迹と言はるる
そや信しゆゆや志賀ととや
一、まのくやとともけりしと万葉の弄とる赤野花
つらりて面影よしとととれと杉政教此取極詞
しりとる言とありぬと此言とらりしとる言と
こそゆき御の味お透せりともさしり此言か言と
取弄とと成はるるあまの言とと此言みこり此
よこれと成別しと言しり事い弄八公の持のあ
なりとるかとのる言とととと知りり人とも
たりとと言の法をたるまくとと病のとあすの義
よとる言れゆ流と志く教せしりや万葉云

みらぬのまらけや系をくはと面影はとみゆふゆと
よきなちりまていん山傷花はうりと而けり
とわつ所よ弄れり海よ切分新分とほりり別
秋もたにう及此よ切分と取の教首のせはらりと
とも程古質はるるま一萬葉のりる者れ梅咲よ
つはれはにこそうにいりちりぬともうもと取く
古今の厚兼よ一兼うとと昔あはにこそうに
こりまてすしとわらんふふふ葉よ人丸津橋
みくまわめはよ一葉良なる人つまらとんい
りよもとる長海と春留とつふ部とく人とけり見
すとやとえと津橋つすじついのまはれふのよ葉の
弄ととた葉胎換骨ともりのつる一竊之前の

花のうらり成面影のの弄ん心乃根原とそらねん
素性の弄よよと極よわもちりあんこさりあふふハ
人よにりみあんは弁種子とらかり弄ハ根は種
子芥のよりとらく百巻の種となすつらうとと今
乃名弄とと種子よとま一あはふハ弄三昧那形
碑ふや古傳よと弄ハ只書を書よ白くよめとけり
是ハ空を過すわらりあや

一主有詞と種書此問にまやありゆはよと及まよ
あまの種あよとあはらり但一主のつ詞とよその
人の名弄詞や只割の種とく世るよまけくま
ふ詞物とつすて種りくともありあはらり
まふといふれらるもあはる是まよと弄れ詞と種書

四つ白よりありつるもの花よりせつらふとふ
そはつ首より人なるは幕席部曲流といふ故に
歎き付は世に才田の白ふわつるあやゆいと起業
轉合といつるごとく歎

一青より白のそくてき詞を衣せりくきこゆ

一水橋よりして橋みよくかろ増ちさうらんや

一佛法の戒とて五戒とありては少くは病の道とも
くは弁とて先すとてふるに命といつて亦は秋に旅

院未利唯酒唯戒と文此の院太子は最妻未

利主人五戒と指く不飲酒不取空器のつ時を

二乃長下罪おましく討討と婦人をもとふ

ためりる太子はさうは主人の唯酒と破りて蓋取

とてしけ給はは下と先とてとて是主人を子に口

たのしめて即初蓋とてしけつる時を太子は味を

合く此下と寛看せつるは下一人もく教百人

の群教とすつりゆりてとては持戒とすつるは

戒といつるはさうくも弁は可増ちさうらんや知る在来の

又戒は仁義礼智信や佛法は下即教生偷盜罪

娼婬語飲酒や但を家人のあまはまきつるはと物

戒とて佛の不殺生たを家の女帝は仁あるを

あまはよく極つる万物の愛憐と物

慮事一是佛の不殺生はあまはの又戒とて

帝とて才とて對するやあまは佛は忠忠ハ

首とて身とて切するはとてとてとて對して一

念不發殺生心也

一法曹律もと輕重と立此は曹ハ宗の法相乃る非
律義の位とつる時の多や戒律の内も地代
中戒地ノ穿く事と切ゆハ物成りり是程の
事ハ法重ハ此のよふ先とるも切一考
スルハ

一尉政もとさや尉ハさつる言也 政ハく取也

一中務卿親日也ハ宗尊見日の御也是也ハ家
ノ判也 宗尊ハ宗尊也 宗尊ハく取一きふ
秋ハハ秋のじゆ由也

時由ハさけハ秋也 宗尊ハく取一きふ
じゆ由ハく取一きふハ秋也 宗尊ハく取一きふ

はくろじりハ風言也 宗尊ハく取一きふ

此并ハのり也 宗尊ハく取一きふ
同網也 宗尊ハく取一きふ

少ハく也 宗尊ハく取一きふ
乃ハく也 宗尊ハく取一きふ

宗尊ハく取一きふ 宗尊ハく取一きふ

宗尊ハく取一きふ 宗尊ハく取一きふ

宗尊ハく取一きふ 宗尊ハく取一きふ

一入道長部卿 為也

一本説とよぶ事

一蓬生のりとしんをいふ事 彼巻の序に三つを更に分かせ玉つて一と云ふ蓬ノ草ヲサナシ侍ル草スヨシ拂セテトセ玉

生れり 尋テ七言ヲトメテカサリフカキ蓬ノ本心ヲトヒトリコトトシテトリテトリ玉ハ

蓬の 蓬ノ草アリ馬ノハナメ拂来リシタテニツル

後巻 蓬ノ草アリ馬ノハナメ拂来リシタテニツル

一校 伏見具一と部の

伏見具一と部 伏見具一と部

中將 中將

原 原

一原 一原

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

詞 詞

玉ノツノ花キヨキシ白糸ノ二カフヤチノ根ハホソクトモ

監織字係有る監係是詩を瓜多未結呪鐘急國扇暫志辰月織トモリ遊トメ

董大将の

のまろと種世より海言をくらひこり給ひ
とやうくゆげとつら女房は傍より詞をけり
給ひくみ木幡の山打むのく御鳥と宇治の
引くともちり流らんくわゆるまは月茶
ゆまはまの儀よれり宇治の山ふく
——や但世は東よりある(抄)しつ時那の山月
かきく——とふあ——と今世の東より
ゆまの西方舞舞の端の端より東と引く
物くらんが引くく——とあり
一本舞と取らば海院の他をまてと
一本歌は海拾をまてとむる万葉と一
古今より海拾をまてとむるのむる
古今より海拾をまてとむるのむる

首の作を中より右近の舞より取らば
他をのむる(抄)海世は撰集ありと
中より舞入る他をのむる(抄)海世は撰集ありと
次は世舞より入る作をまてとむるの
と左院よりや
一本練の人舞と左の舞も案して
一本舞より二の舞も案してとむるの
絶妙舞ととむる(抄)海世は撰集ありと
ひや二の舞も案してとむるの
とむる(抄)海世は撰集ありと
とむる(抄)海世は撰集ありと
とむる(抄)海世は撰集ありと

不生の觀解よ作すらんまらふらん
よまじとてハ音聲立回と來立一月常とまら
とてハあつて依見ハ里瓜來立すふ是教ハ他人
弄りり愛ハ弄りりひるわりと極りくゆく程
よりらんも忙指とて虚定のおとて母教弄りり
とのハ常ハ愛とて退居すらんや六教弄りり
思くは三昧の乃佛とておのたれまは佛性
とりとむ弄りりまらふらんとておのくをわら
弄りり種瓜來立とておのかり妙位はあつとて
款とみよるらんとておのくを弄りり佛性の
ハ瓜ハ一抄の乃心とすらんや
一和歌式より遠よてせ山乃て月乞ハ容易くお來

ハ弄りりハ平生の三昧とて入らんとの自然とて
乃任坐卧乃向名弄りりお來する事ありか極の言
ハ終來立とてよみらん弄りりもすらん事あり
是ハ即作ハ不弄りりお來らんあり
一弄りり風舞ハ人乃てのくおとて
一利ハ思念よそらん元舞ハ是ハ古今の間ハ弄りり
一ハとて好まよと難乞と早下ハ御音也
一花ハ花黄玉舞ハ是ハ舞玉乞ハ詞信ハ依慈の安也
わら舞よとけりあつらんて舞く黄あらんを
むとあまら詞也
一片ハ月ハハ雲ハお抄ハ弄りりハ月ハ
こいもたはあてもあつらんをいふハ

とせり

一貫之弁よりうらなひを記すものとすのりともなを了ん
あつてはつる月報世弁こころ月の方よりいふ
母心葉のちよよとるのせしとく秀弁なる所と
考へくまよおふいり可恨乱

一弁と正のつらひのくよしり

一池あり凍地ありとふ瓦の吹おく、あまうらな
いふとせり

一階約要約急 あひまやあらぬしり記しつらく

百来りありしり記せんとは世弁ハ首或男乃
女とありひけしり百来来く車の榻は神て
そ弁と百来は海ゆらなりんとしりしりは男九

十九来くく海のく百来よとる其男は親記

て不來とありの如くありて弁と一捲とくあり
弁よりありしり榻のしり記百来とくえうあな
はしりすくく次略つらひと百羽とく世弁と
作念回ありしり様よりと別の地念の様よ
ふつらふ百羽捲とくも勢の羽ととけく捲とく
まよ百来ありしりてしりてあり榻端捲と向

ら

一等思由人急津田の生向れけしり名の左の男は浪

とやありひなるあり世弁の心は者ありしり二人捲と
霧をすつりりしりしり白男ちねのますしりおとく
二人の男と聲よ物来とありしり女とわ傷とく

はまの川のなみけ射のてうらなと聲よととく
ふ則はるを射よあ人あ一音よとそりそ射うの
女生の川よ身と投ゆり二人の男よとちりてを
ぬ此中流と取くしゆり決る此証の下よて雲井
乃唐とあ葉れ言との事とよあ是上を海よと量
大将と吾部乃乃言とれもともゆゆきりそはすに
浮舟れ心言乃くふ引ゆりうとてなとあつあり
雲井唐とあ葉れまも言れとすすこころ
いくたといふちぬのますともぬのさ白男よ心
くつとつるゆい雄れ事あり難事乃下てこころも
名弄なりと

一結題作別乃事此音それも院弄とあけれぬは

釋するふ友とも花下と白木れとふま地
極を抄しむくこれにいれまこつ野色よこころ乃
あくつらん花しちすいも白の白とこころ
ふ心ねとるを但切弄よ花乃中よ何とつる事
人ぶの弄ハ花とぬくあつよりあちこつとれを
ああつらよまあく花はすつるをあ花とく花
宿成りまらつるすこ是も白の白とあつら
唯花一葉乃るを編めこつらああ人よお遊せり海世
びこつらとくも別しゆつとあや
一語乃文字はあはさしよし事とあ葉よ花とあ
こころんあつらとつら吹山乃あつらと此弄とい
たされと

終く心とてしよえ弄の想解は喜れ山の花乃妖艶
なり姿美女よたとくしりゆりゆり文世他このり得
ふと誰家碧樹驚啼羅幕尚書是花堂夢
覺珠簾未卷竹約のころ喜れ花の盛しりく
孫なり樹風系なれよ喜の半は喜も既し催し
ゆるふ羅幕ありゆりゆりあくゆりゆり
青衣乃花堂より暎の移りゆり
ともる巻ゆる折音情のありしと是れは
乃并ハ翠なり巻も山花感なりゆりゆり
誰堪れ珠の巻とすれゆくゆりゆり花も
又喜一なりゆりゆり楊をれ喜ま人の
ゆりゆりやめ即花奴とく花乃女とふゆり

清るといふ字ハ珠簾と巻わつる時ハ
すこあり喜よれゆりゆり
一お喜よ海ありゆりゆり海も面とそがらゆりゆり袖れ
なり林乃ゆりゆりふりゆりゆり安也人ありゆりゆり
かちと湯くつるゆりゆりあり安也の色白袖する事
自余是まて十喜知此弄の心喜持喜れ
林ハ愁乃すここの喜れ及愁人ありゆりゆりゆり
海れゆりゆりゆりゆり心なりと林乃山と林の理ゆりゆり
て袖乃ゆりゆりゆりゆり喜れ海ハ喜もなりゆりゆり
えりゆりゆり袖ゆりゆりゆりゆり秋のゆりゆりゆりゆり
袖ゆりゆりゆりゆり秋のゆりゆりゆりゆりゆりゆり
一古柳お喜ゆりゆりゆりゆり喜れ花のゆりゆりゆりゆり

多そ——くわく世平あるまことんぬお勢も又うう
ふしと多し及清和貞観の時ゆの文屋乃る多
美葉集ハいつくしりは機そとゆらふしと平と
以勅書して云神事自時由うりそけり桶の葉乃
名よ抄ふ言れらるるしとそこれい平いそしめてふ
よりりあうは奈良系より平安城(清遠)に
乃りあうし一郡と錦地とらる是桓長の中つ
延暦三年は奈良の郡とこりゆのく山城は郡
郡とつ西の界は假し郡と立回十三年よりと
の郡は今平安城と立給ふとれハ今の花は郡
は對して古き郡乃りわらる安城はかりひやま
只奈良よ——これのちまらるることしとよりり但し
乃思意所詩を云南有花水錦帳下庐山雨夜草

庵中此の乃らるるくよりり南有の錦帳乃あは花
盛れわらけと今の郡は此——庐山乃雨夜草
系統とわらるる奈良は郡乃る様よすす今
めり城考く上黄乃平よりり又まと首置そ
せいの花錦は而新よしかりらるる——林のむら
くはれ考くくうの合すす
一山家東朝夏海すく人うはらるる花抄記の
とと新よししとつわらる安や 是古平は郡地のか
たる——云るまの考よしつとそもつらるる目の
山里ハ草は系よそ冬風——りけるももあは
却考くくよりり却教ハ冬のも人めらるることわらる

といつとてかとうあり又人のと車と回極うれ
く付けあすと一もしててまの糸よそとよあり
やうれとありふ別とてささや

一付る葉葉その一林成らわと惟る若田川み
ゆり山姥の神此年立田姥の林の一季とつさ
里いれと山のふ取とてり若田川よるうく
葉の冬や山姥のたけは葉葉うくわる姿ふ
も改秋とて目とるりそとあつる今冬
川よあく葉葉あつる山姥の林たわる根
つてきて冬よあくはの延ふとや想しては
廻るとつるゆりの根山根根源あり此年の作
立事ふや志と持とせらるゆいれささの若

より思ひわりの意大將信舟は若成を信よりと死
ゆり一とあるな言ふのよゆはくは志ふ葉葉
らわ事あくはくは葉葉の年改ゆり
ともあくと末の松まつんとあつるひつるふい
まくさ船けははとすそりありはる葉
若田川の葉葉よりして信舟と山いり
て葉葉はみみけはゆりことあり此と
字と一林とささ葉葉と合くとありみの
次は松山乃ちゆり世よとありはも昔夫婦
ふとの奥列へりりま愛心のありとて彼末の
松山とはゆりゆり事あはゆりゆりゆり
後かとてはま飽方よぬと部とあり時を極直

よめく文章と流るるてゆく世にゆく物事合と
そせしむるなりあ時よ始るる清きあまはた
は道古實と不ぬかあまもや此よ毎傷其舞
つる中事一轉妻れを極とよむゆいゆあ
とも舞とあまらふとありあくくをれとて
らりて舞もあまらるるや只増成りく
りくと舞すまは則悲海とまはるる志也此よ急
乃舞入あまらふ沈すくそまけし舞る
姿うりくけりさあくあゆるをままに
しく詞ゆゆふ風家さうけくもんと
あれゆい事れあよりるまよと此ああま
と舞れしとせら時えくをれとる舞とを

いさあらゆりなる里決よ三所の弁よ事りあひ
言れ面よゆきはくくゆするふう及

一は華經のふあといふ取くたといふ是は義
の中「雅」の字は相由弁や在介し序は弁大雅字注云々二十弁ゆのすうは 殆れとるを
知てそは可くもれはゆいゆすする弁也又詞よ

らりく流よまんとゆりハあ義中此風の
まハ殆又と流わくまをすまらる弁とあ
らりさりく弁れ子ゆをひわいといハ都あ不
知弁や昂風の舞の姿あみすすそあ相り
さりて風法華經ノ説達華ニ當辨譬之喻 決了は花燈と七
とさるるは是は自己の蓮花に譬を喻の方もある也
まより始く譬を喻ふ三車一火宅の喻信解

尊應化お世壁を奇ふの清めこやと申す生と
 ころハ三界共向の生流轉れ生痛くも也三ふと
 欲色等過界や物中ニ業ハ減智とも世中
 変化一始ふ生と三界等安行の火宅と縁を
 或ハ又止宿車庵ともけり佛見入たニ業ハ空
 觀と喜見城のまゝ之轉輪者自れ七類も只
 わさきしと車房れ中や也して世の大小ハ
 はニ業ハ減智と縁始ふと也とニ業ハの心と
 一切を情と変化一始ふのほや群車ハ
 色同業鹿車ハ縁覺業此ニ業とくはも未車
 店とやともすまた田ふ車やともけり牛車ハ
 菩薩業や は大白牛車ニ業して是ニ三

界ハ車の店成りともすの始ふ縁相やいんも凡
 夫ハ前生とや色等の因縁者中ハ前生ハ二
 を抄りつととと流轉りつとくは并ニ界
 又孤獨とつととのあつとつと親とあつと
 愚癡とつとつと困とまつとつとつとつと
 とつとつとつとつとつとつとつとつと

一界合界ハ世言向よみゆりあわつとつと但後
 後者即流ハ流抄れりともすの始ふ縁相や
 無邊定空家澄ホの界轉れ縁とあつとつと
 とつと抄れりともすの始ふ縁相や
 吹りぬれりともすの始ふ縁相や
 何れとも世中風流りともすの始ふ縁相や

所もなれば様々穀慮の紙中くくり物々家落
神に風骨すくふかやふふ勅判の紙くくや
まはもあ神の沙凍とそふふ切もふふ家落
の并よ紙くくくんとそりひの津田のくく白紙
秋もふふくり時并ハ天籟葉籟とく初秋の気
色もわつ時自物と風系れくくく築あり葉
籟とまありくくや生るの葉とくくくくくく
集よ清風り青よ葉すまはと海物と津の
田れ生るのくくふ秋れくく月風と云青りり
まりまらるこれと昔の紙とも四とく目紙ふ
水屋家落の青りり生るれりり西南とくく
海色ちくく西なまは西風ちきりふくく立也

くくくく涼氣と賞せんとくくくくは清く
森よまてくくく秋風くくくくくく日りり
先ちくく回ゆくんとまあり心よ風もくく
は清風り風とくくくくくくくくくく
付まてと家落の青りり風りり紙とのくく
の露れくくまの青ハは毒の葉れくく
事ハ白偏たりふ風れくくくくくくく
な風風よと先立付そとまありくくくく
清風り青れ風とくくくくくくくくく
定来れ心くく家落の心紙くくくく後
上皇も御を清れくく定来の青とくく
清吟録もくく終れくく定来と家落くく

公食より一と進次源氏乃物指れ昇の心とた
とゆるはひ笑の釋せりうとくみ物指し詞と
とて昇と入るるあなれうはり詞ととら
らうと守とらうるハ昇れ詞とありと巻中の
まや決よとともうくと及只思惟するも
一昇れ病とらうる事とを来とこのと疾乃ゆはなく
しうハ一向は病れゆはありと演成喜撰孫
傳式等おましく昇のうん様我律とせめは
てうと風流ありとありゆる間と後よは決よ
おまてと吟味うらうとくたはらととやとと
回病とらうるハ乃のふとましくれまの字つれなま
まれ字もハ回字の疾なりと回心病ともつふ

やうと決ゆは霧とくはれれ字といはれけく
乃れ字と白れ終よはハ回終右のまハ色物れ病と
いふとてよとたの字やれまといまも白れ終よ
しりとも吟味やつましく昇よまといと
媽のや決よ平次の疾とハ初れ又文字のみの
ふと中なるみのまと回まを媽や但こつと
まハ割のつたりよ何とと決まもふとんま
らうと守と書らうとくまぬとありのま
舞よハ車懸れ舞のこつらうとハ色物れ病と
まと平次の病めれも名ふとならうとハ色物
ら及よと巻後と後終と章よ昇勢とありと
らうとや 或時巻後のま来らるれ終とて

とさける弄也はうすくはらば後れを
言とせせしめて極ちるもの
てとせての言成をくも
く新なる風情なれとも
うらむるやと後見す思や

一弄字三平一字一修り事
をよひしをぬきなり
あひのり
重や
后より
清也や
とありわ
少ゆる事

一弄月一弄字と修り事
の病と
月け
なれ
ま
う
け
言
弄
と
さ
と

妙やい細とらぬねとらぬハナと一ハナとハ細とらぬ
して細とらぬハナと一ハナとハ細とらぬ
まろ人ハナと一ハナとハ細とらぬ
あして細とらぬハナと一ハナとハ細とらぬ
別難知と音ハナと一ハナとハ細とらぬ

一唐所の系物ハ世音ハナと一ハナとハ細とらぬ
月花と音相應の所ハ細とらぬハナと一ハナとハ細とらぬ
よめんと音ハナと一ハナとハ細とらぬ
ハ系物ハナと一ハナとハ細とらぬ
瓦礫ハ現すと音ハナと一ハナとハ細とらぬ
うらねハ一ハナと一ハナとハ細とらぬ
ハ音のハナと一ハナとハ細とらぬ

さぬかりと音ハナと一ハナとハ細とらぬ
のうと音ハナと一ハナとハ細とらぬ
よめんと音ハナと一ハナとハ細とらぬ
一曉ハ音と音ハナと一ハナとハ細とらぬ

一其社檀の檀海の音ハナと一ハナとハ細とらぬ
契度ハ音ハナと一ハナとハ細とらぬ
ハ音ハナと一ハナとハ細とらぬ
よハ音ハナと一ハナとハ細とらぬ
気ハ音ハナと一ハナとハ細とらぬ

○奥書云

一徳道の始修者ハ名ハ徳と音ハ細とらぬ
ハ修者ハ音ハナと一ハナとハ細とらぬ

握せしは傳て是も年々新しきと云く此の
そしと別有世れをいへく此の國をと究

一 根里純王の十夢天台の書に大徳の中天生小
波王十の夢とみしりし中ふま珠と数ふふ

とつる夢ありま珠摩尼とて佛に在嚴よ
餘まらむやま珠と一珠をりて人の物とて數

と取く我真珠と人のこゝまをるま也をいはは
の依書は者まは法を圖く依書ありと書まを

れと禁しる夢やま成書成よと行く
けり書し奇なるは書物の作業とるり林内和

光れ内院孫傳し奇者物ま真珠の摩と純
者と人我をいぬくこひをせり事するふ和ま

彌流と續ありま珠のたといはしとま先
師竟者法下種成せしりや何く累祖の
作ありとも後世子解しとて及な成をと成する
事ありとまや

一 慚愧地二字慚は天よりあり愧は地よりありや
一 莫宗千人の首とするは莫宗といふや是は成

一 中敷是は佛の此道法の書や或は中敷を
ハ麻蘇なるは地と云はれあり

一 摩介は系是世摩の介は是世も成紅摩とも
つるや世成のつるなるは成のや

一 不覺の泉石入膏膏是は和の解はは成

草木花鳥の朽腐の声病と云ふまた事膏盲
よ入るる病は治する事ありとも此病
小限く治する事ありとす膏盲は疾醫王拱
軍として某師も此病よりのつくづく遠く病ふ
とや拱ともしや和弁は病疾となる
おとくは修のする事不足とあり
一積来く而為烟霞痼疾とは是は和弁は主と忙
却して寒熱涼燥と云ふこととてやせ病
とならりとや膏盲の病烟霞乃姿よ不成
病は修のする事ありとす膏盲は疾醫王拱
一益似得江山之助是は海山の系統と云ふ我心の
心よし事ふらんをあり

一臺雪の勅命ふりふりて字念れ他はや
一維摩する病をハ維テ一黙して文を病の
物も文珠の言はるるもまじく病を病とて
りり病を病とて及御言一黙せば只今病を
本の病を病とて一黙して病を病とて
一管よ天津室と云ふは我思見管と目か
りり病を病とて一黙して病を病とて
やとてあり
一蟲よふりて病と云ふは病を病とて
作らるる病の病を病とて病を病とて
一切病の病を病とて病を病とて
して病を病とて病を病とて



